

1990.3.17

平城宮跡第205・206次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所

平城宮跡発掘調査部

I. 概要

〔目的〕 従来の調査で、兵部省に比定されたこの区域の主要部の全容を明らかにする。

〔期間〕 1989年10月3日より開始し、現在継続中。

〔調査面積〕	205次	1,700㎡
	206次	2,700㎡
	計	4,400㎡

〔既存の調査〕

・167次(1985) 官衙の南面築地を検出。壬生門をはさんで対称の位置に同じく築地を検出して(165次)おり、その位置から前者を兵部省、後者を式部省と推定した。

・175次(1987) 西面築地及びその内側の廊、築地内に礎石建物2棟を検出し、平安時代の文献及び周辺の出土文字資料から兵部省推定の裏付けを得た。

II. 遺構

今回の調査によって、兵部省の遺構の全体配置がほぼ明らかになったので、復原図のように各遺構に仮称をつけ、解説する。

1. 築地(東・南・西面) 整地土の上に橙色の粘土を積む。積土がわずかに残り、また寄柱の痕跡から基底幅は1.8m(6尺)で、高さは3.6mほどと考えられる。東西規模は75.2m(255尺)、南北

規模は北面築地が未検出のため不明だが、東西と等しくする可能性はあり、全体として正方形か、やや縦長の四角形に敷地を囲むと考えられる。当初は築地のみで内外に雨落溝を伴うが、のちに内側の雨落溝を埋め立て、礎石建ちの廊を付け加えている。東面・西面で各1ヶ所、南面で2ヶ所の暗渠がある。

2. 東門 礎石建ちの八脚門。桁行中央間3.9m(13尺)、脇間2.1m(7尺)、梁間各2.1m(7尺)。西側の基壇縁石が良く残る。

3. 西門(175次検出) 礎石建ちの棟門。柱間3.3m(11尺)。東門と中軸線をそろえる。なお、南門は道路下にあたるが、推定式部省の知見から柱間3.9m(13尺)の棟門と考えられる。

4. 廊 礎石は上面の平坦な自然石で、径40~60cm。築地心より3.3m(11尺)の位置に配され、柱間も3.3m(11尺)。東西面では門前以外のすべてにあり、南面では南門の東西各4間であると推定される。東面には礎石の間に地覆の瓦列が残り、おそらく連子窓となっていた部分があることがわかる。廊の外側に雨落溝がある。

5. 区画塀 築地内を大きく二分する堀立柱の東西塀。柱は柱根を残すものが多く、両端は東西面築地に接し、柱間は8尺強であるが一定しない。柱を建てた後に雨落溝を掘って幅0.9m(3尺)の基底部を形成し、その肩を丸瓦で保護するという他にない工法である。東から3間目と12間目の基底部上面は瓦と石で舗装しており、出入口としていたことがわかる。

6. 正殿 北区画中央の東西棟。南側柱のみを確認し、桁行5間、柱間3.3m(11尺)。

7. 西脇殿(175次検出) 正殿西の東西棟。正殿と柱筋をそろえ、桁行3間、3.3m(11尺)等間。梁間2間、各2.7m(9尺)。正殿をはさんで対称の位置に東脇殿が想定される。

8. 東西第一堂 礎石建ち、南北棟。桁行3間、3.9m(13尺)等間。梁間2間、各3.0m(10尺)。南側面の東西に、先の区画塀と同じ工法による塀がとりつき、築地との間を閉ざし、中央広場側では北へ折れて建物を囲む。

9. 東西第二堂 礎石建ち、南北棟、桁行5間、柱間4.2m (14尺) 等間。梁間2間、各3.0m (10尺)。西第二堂は比較的残存状況が良く、基壇積土と縁石及びその抜取り跡、東雨落溝の側石を留めている。礎石は径50~70 cmの、上面を平坦にした自然石であり、半数近くは原位置付近に落し込まれて残り、細部がわかる。北側面と築地の間は、第一堂と同様に塀で閉ざす。

10. 中央広場 東西33m、南北50mの広場。東西中軸線近くに大きめの礎が多数置かれて残り、礎敷の可能性はある。

III. 遺物

土器類の出土は極めて少なく、主な遺物は整地土中及び建物・築地周辺の大量の瓦である。軒瓦の時期は、奈良時代後半のものが主体である。ほかに東面築地外側から鬼瓦片や隅木蓋などが出土。

IV. まとめ

調査の結果、八省の一つである兵部省の敷地と、周囲を囲む施設、内部の建物がくわしくわかり、奈良時代の建物や塀の工法にも新しい知見が得られた。建物は中央の広場を囲むように、整然とした、南向きのコの字形の配置をとるが、門は、壬生門側の推定式部省と相対する東門を、最も格式の高い形式としている。官衙内の各建物がすべて礎石建ちで瓦葺と推定されるのも他にほとんど例がない。

また、一般的に宮内では遺構の重複がみられるが、今回検出の遺構は奈良時代後半の兵部省のみである。この兵部省は長岡京に遷都するまで存続し、平安京における同省の位置に引き継がれる。奈良時代前半の兵部省が、現在わかっている遺構の下にあるか、あるいは他の場所にあるのかについては、今後の調査をまちたい。

V. 周辺出土文字史料

1. 「天平宝字四年 □ □史口考状」
(軸木口墨書 157次SD3715)
2. 「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」
(軸木口墨書 155次SD11640)
3. 「兵部厨」「兵部」「兵厨」
(墨書土器 157次SD3715)

《参考》兵部省について

- ・概要 大宝令による太政官下の八省の一(右弁官)兵馬・造兵・鼓吹・主舟・主鷹の五司を従える。
- ・職掌 諸国の兵士、軍事のいつさいを司る。武官の人事を掌握。
- ・兵制 五衛府(衛門・左右兵衛・左右衛士)防人(防人司-太宰府)軍団(諸国)
- ・長官(卿) 正四位相当、おおむね参議をかねる要職「内外の武官の名帳、考課、選叙、位記のこと兵士以上の名帳、朝集、禄賜、假使のこと兵士を差し発さむこと兵器、儀杖、城隍、烽火、のこと」(『大宝令』)
- ・職員構成(人数) 大輔(1)、少輔(1)、大丞(1)、少丞(2)、大録(1)、少録(3)史生(10)、省掌(2)、使部(60)、直丁(4)

調査区位置図

朝集殿院

NO. 4
● 64,391

兵部省

式部省

壬生門

大堰

150

185

175

157

206

122

165

205

167

66.5

65.19

65.7

66.0

64.9

BM NO 177
● 65,170

63.0

63.6

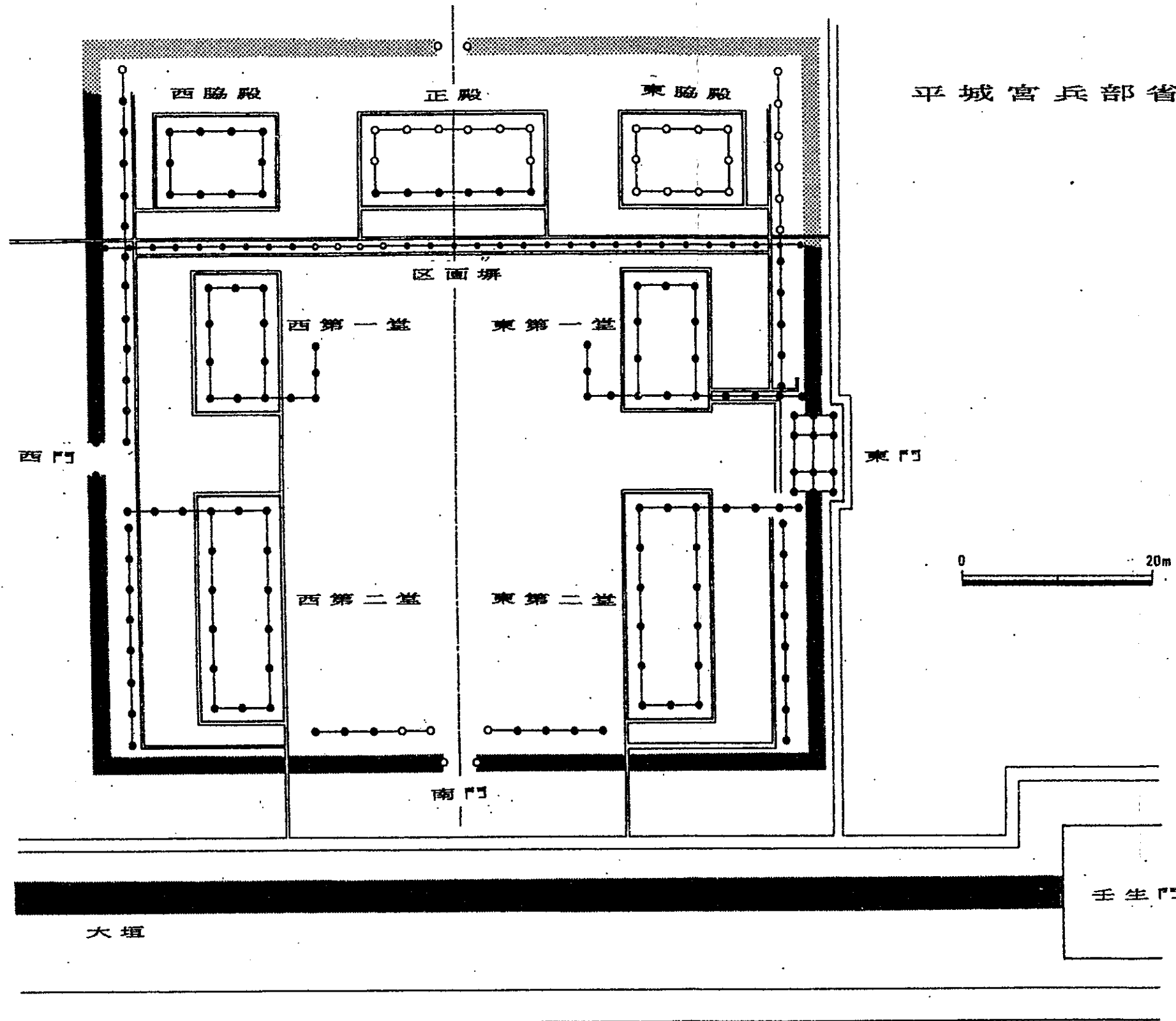
63.2

64.8

63.4

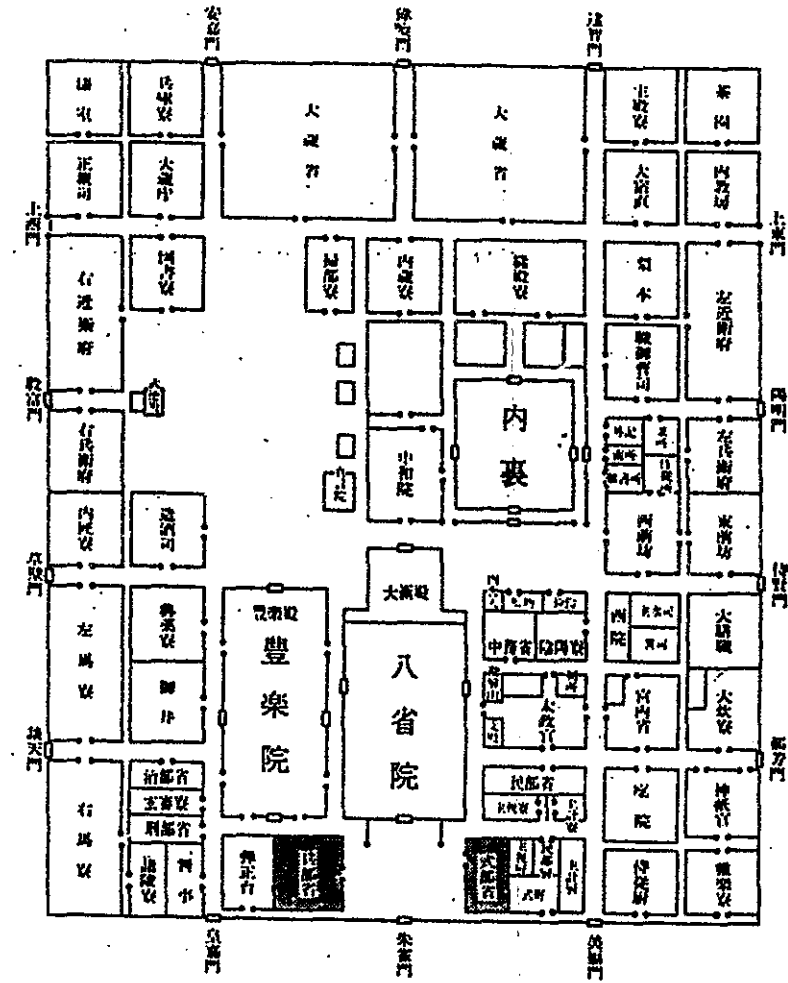
62.5

平城宮兵部省復原平面圖



歴代主要兵部卿名一覧

任官年	人名 (位階)	備考
大宝2 (702)	大伴安麻呂 (従三位)	旅人の父、大納言
天平3 (731)	藤原麻呂 (従三位)	不比等の子
天平9 (737)	藤原豊成 (従四位)	武智麻呂の子、右大臣
天平18 (744)	大伴牛養 (従四位)	吹負の子、中納言
天平勝宝7 (755)	橘奈良麻呂 (正四位)	諸兄の子
天平宝字元 (757)	石川年足 (従三位)	御史大夫 (大納言)
天平宝字7 (763)	藤原永手 (従三位)	房前の子、左大臣
神護景雲2 (768)	藤原宿奈麻呂 (従三位)	宇合の子、内大臣
宝亀5 (774)	藤原継縄	豊成の子



平安宮宮城図 (陽明文庫本による)

平城宮朱雀門の調査

1. はじめに

朱雀門は、平城宮の南の築地塀（南面大垣）の中央に開く門で、朱雀大路に通じる平城宮の正面玄関である。これまでの発掘調査の結果から、東大寺の南大門の様な堂々たる門だったことが明らかになっている。今回の発掘調査は、平城宮を奈良時代の姿に近づけようという計画のシンボルとして、朱雀門を復原する事前調査として行なった。朱雀門の中央から北半分は1964年に調査しており、大きさなどが明らかになっている。

2. 検出した主な遺構

1)朱雀門 発掘区の中央に位置する。瓦葺きの二階建ての門であるため、建設地を掘り下げて地盤を固める基礎工事（掘込地業）をして基壇をつくっている。基壇は、後の時代に水田を作った際に大きく削られているが、ほぼ東西34m、南北18mの大きさに復原している。柱は、基壇に埋め込んだ「礎石」の上に乗っている。礎石には建物の重さが強くかかるため、下に人頭大の河原石を「根石」として置き、沈むのを防止している。南の柱列の根石の南方には、自然石の礎石が残る。

2)南面大垣 朱雀門と同じく掘込地業を行ない、その上に土を積んで築地とする。幅は下で2.7mあり、高さは6mほどだったと推定できる。積み土が一部残っている。南方には、築地に葺いていた瓦が落下している。

